

## 7・思い出せない記憶

6から数週間後。三月。まだ主人公達が住む地域には雪が残り、肌寒い時期。主人公とトワ、温泉地まで一泊旅行に来ている。

しかし主人公、一回温泉に入った後、疲れて部屋で寝てしまった。

トワ『よっぽど疲れてるんですねえ……』と思いながら、すやすや眠る主人公の隣で、鼻歌を歌いながら隣に座って眺めている。

トワ、正直なところ、寝ているこの隙に主人公にキスしたいと思う。

『でもそれ、ちゅーした瞬間目を覚まされてバレるやつですよねえ……。日本のコミックでよくあることです……。』と思い、何もせずにただ主人公を見つめている。  
そこで、主人公が目を覚ます。

**SE1**…【5秒ほど流してからセリフ。その後、トラック中ずつと流す】部屋の環境音

〈トワ〉

「【十秒ほど、適当に鼻歌を歌う】

ふん…ふん…ふん…ふん…ふん…」

主人公、教えたつもりはないのに、トワが自分の好きな曲を歌っていて驚く。  
曲は十三年ほど前にリリースされた曲。時期的にトワが知っていても不自然ではないが、主人公はそれに妙な引っ掛かりを覚える。

**SE2**…【0―5秒くらいまでを使用】主人公が布団から起き上がる音

〈主人公〉

「はへっ。寝てた……？」

〈トワ〉

「あ♥ 起きた♥

はい♥ 温泉から上がってすぐ、ぐっ、すり♥

お風呂入った後って眠くなりますよねえ」

**SE3**…【0―2秒ほどまでを使用】トワが起き上がる音

**SE4**…トワがペットボトルのお茶を注ぐ音

〈トワ〉

「はい、お茶♥ 喉乾いてますよねえ？」

SE5

…【3―4秒ほどまでを使用】トワが横に腰掛ける音

〈主人公〉

「あっ……ありがとうございます……。今って何時……？」

〈トワ〉

「四時です♥ まだお夕飯まで時間ありますから、大丈夫ですよっ♥  
アーリーチェックイン様々です♥」

〈主人公〉

「そっか……よかったあ……」

〈トワ〉

「ふふ。よっぽど疲れてたんですね。  
まだ寝ててもいいんですよ？」

〈主人公〉

「ううん……せっかくトワちゃんと一緒なのにもったいない……起きる……」

〈トワ〉

「わあ、嬉しい♥ じゃ、ご飯までおしゃべりしてましょっか♥」

〈主人公〉

「そうだね。じゃあ、なんのお話しよっかあ……」

〈トワ〉

「何のお話しますっ？」

主人公、これは話してみるチャンスかもしれない。と思う。

主人公は以前トワにはつきり否定されたものの、未だにトワと自分は、昔会ったことがあるのではという疑念がぬぐえない。

それを確かめるために『夢で見た』ということにして、過去の話始める。

〈主人公〉

「……そうだ……。あのねえ……夢を見たよ……」

〈トワ〉

【「優しく」

うん？　どんな夢です？」

SE5…【0―3秒ほどまでを使用】トワが横に腰掛ける音

〈主人公〉

「……昔の夢……」

昔わたし、事故に遭ったことがあって。その頃の夢なんだけど……」

〈トワ〉

【「心配そうに」

ああ、昔の……。サトリから聞きました。

アナタって、十三年前の冬。

お友達を助けようとして事故に遭って。その頃の記憶がないんですね？

何か、思い出したことでも？」

主人公、頷く。

さとり曰く、当時自分は、友達一人、合計二名で外で遊んでいた際、道に飛び出しかけた彼女を助けようとして事故に遭い、二人そろって数日目を覚まさなかった。

しかも目を覚ました後は、事故のショックで、二人とも十二月に起きた出来事を、ほとんど忘れてしまっていたらしい。

さとりが1で言っていた「困ってる人を見たら、考える前に助けちゃうの。十三年前の時だって……」というのは、このことなのである。

しかし、主人公はその話に今でも納得がいていない。

携帯電話に残ったスケジュールによると、当日は『さとりも含めた三人で、主人公の自宅で遊ぶ予定』であり、事故現場は、主人公宅へ向かう道とは、まるで別の場所にあったからである。

さらに主人公、当時自分にはとても大切な何かがあって、それは、絶対に忘れてはならないものだったような気がしている。

事故の件同様、携帯電話に残ったメモには『それ』に関する記述がある。

しかし、当時の自分は誰かに見られることを恐れたのか『それ』に関して、万が一メモを

誰かに読まれても問題ないような書き方をしている。

たとえば『彼女と一緒に過ごして楽しかった』『彼女はこんな音楽を好んだ』とはあるが、それが誰なのかは明確にしていない。

もしかすると、相手はさとりや、あるいは一緒に事故に遭った友人なのでは……と解釈もできるような、あいまいな表現にとどめているのである。

主人公、今でも、当時のことと思われる断片的な光景を夢に見る。それは、自分が小さな生き物を抱いて、こっそり夜の公園に行く夢である。その生き物が何なのかは思い出せないが、自分にとってはとても大切な思い出であったはずだ。

そして十三年が経過したが、主人公は、十三年前一緒に公園に行き、自分が『彼女』という名で日記に書き綴った存在こそが、火災の日に助けてくれた謎の存在ではないかと期待してしまうことがある。

そして今トワは『彼女』が好きだったあの曲を歌っていた。

あまりにも荒唐無稽なのはわかってはいるが、主人公には、トワと、火災の日に助けてくれた謎の存在、そして『彼女』が無関係だとは思えないのである。

〈主人公〉

「……思い出しているんだあ。でもね、確かめようがなくなつて。

わたしと、もう一人しか知らないことだから。

現実にしたことなのか、夢なのか判別ができないの。

だから、本当にただの夢なのかもしれないし……。

実際に起きたことなのかもしれない。

——わたしはその頃、公園に行ったはずなの」

〈トワ〉

「公園？」

〈主人公〉

「……うん。私はその人……。いや、人なのかな……。

わたしの手で抱えられるくらい、とても小さかった気がする……。

……とりあえず『人』にしよう。

わたしはその人に、その公園の景色を見せたかった。

だからある日、夜にこっそり家を抜け出して、一緒に出掛けるの。

その日は雪で、すごく寒くて……。

とても長時間外にいられるような日じゃなかったんだけど……。

その人はすごく喜んでくれた。わたしはそれが嬉しかった。

短い時間だったけど、すごく幸せな思い出になった。

でも、誰に聞いても『そんな人はいなかった』って言う。  
つまりは学校の同級生でもないし、塾や習いごととかで出会った人でもない。  
昔から近所に住んでる仲のいい人であるはずもない。  
もしかしたらお見舞いに来てくれるかなって思ったけど、その人は現れなかった。  
それどころか事故以降、完全に消息を絶ってしまった。  
じゃあ、あの頃わたしが仲良くしていたの人は、一体誰だったんだろう。  
存在しないはずなんかない。  
あんなに、とてもとても仲が良かったはずなのに……って、思うんだ」

#### 〈トワ〉

「えーっと、当時仲の良かった人？ と二人で公園にお出かけして。  
すごく楽しかった記憶があつて。  
今でも、というか、今まさにその夢を見たけど……。  
自分は事故で記憶をなくしてしまったし、その人と会う術もない。  
さとりすら、その人を知らないみたいなので。  
それが本当にあつたことなのか、それともただの夢なのか、確かめようがないってことで  
すかあ。  
……でも、抱えられるほど小さいってことは、その人って相当年下か、そもそも人間じゃ  
なさそうです。  
アナタ。その頃隠れて動物を飼っていたとか、ですかねえ？」

#### 〈主人公〉

「わからない……。でも、会いたい……。  
だから、わたし、ずっとその人を探しているの。  
この街で待っていればいつか会えるような気がして。  
たとえわたしがわからなくても、彼女が覚えていてくれたら、彼女の方から声をかけてく  
れるんじゃないかって。  
今でも……どうしても……期待しちゃうんだ」  
一方、トワ、主人公の話に激しく動揺する。  
主人公とその友人の記憶は完全に消したはずなのに、断片的な部分ではあるが、主人公が  
それを覚えていたからである。  
トワ、そんなことはありえないと思っていた。だからこそ自分はまったくの他人、最近初  
めて会ったばかりの人間としてもう一度会いに来たのである。  
しかも主人公は、今でも自分を探して、待っているのだという。  
トワ、どうしたらいいかわからず、混乱する。

〈トワ〉

「悟られないように明るく」

ははくん。だ、か、らアナタ。

トワと初めて会った頃に『昔会ったことないか』って聞いて来たんですね？

トワ、何でもそんなこと聞くんだろお？　って思っていましたよお。

そうだったら、素敵でしたけど。そうじゃなくって、ごめんなさい♥

【少し間を置いてから優しく】

……今でも会いたいです？　その人に？

〈主人公〉

「会いたい……。会って、わたしが忘れていることを全部取り戻したい。

そしてできるなら……。もう一度仲良くなりたいって思ってる……」

トワ、たまらなくなる。

一度主人公から離れて気持ちを落ち着けなければ、とても今日一緒に一泊することなどできないと感じる。

トワ『唐突ではあるが仕方ない』と、身体を起こす。

〈トワ〉

「あはっ♥　なーんか妬けちゃいます♥」

SE 6

…【8―13秒ほどまでを使用】トワが起き上がる音

〈トワ〉

「……お話したら、何だかお腹すいちゃいましたね♥

トワ、ちよっと下の売店でアイス買ってきます♥

アナタも何か欲しい物ありますう？」

対する主人公、やはりトワは無反応であった。やはりすべては自分の妄想なのだろうか？  
と不安になる。

だが、どうしても納得がいかない。

直接聞く以外にも、まだ試す方法はあるはずだ……。と知恵を絞る。

〈主人公〉

「ううん？ 特にないかな。待ってるね」

〈トワ〉

「わかりましたあ。では行ってきます♥」

トワ、軽快なリズムで部屋を出ていく。その姿には、一見動揺は一切感じられない。

SE7…【0―10秒くらい】トワが畳の上を歩く音

SE8…【0―5秒くらい】トワが部屋の扉を開けて、閉める音

SE9…【0―7秒くらい】トワがスリッパで歩く音 ※しばらくして、止まる

トワ、一人旅館の廊下を歩き、エレベーターの前まで行く。  
周囲には誰もいない。そこで、ぼつりとつぶやく。

〈トワ〉

※台詞前に、大きく息を吸う音を入れてください。

【暗い声で、ぼそりとつぶやく】

潮時、かな……」